

## 命二つ 立教新座高校入学式祝辞

### 命二つ中に活きたる桜かな

これは、「野ざらし紀行」にある、松尾芭蕉の一句です。

前書きに、「水口にて二十年を経て故人にあふ」と、ありますから、芭蕉が、今の滋賀県甲賀市の水口で作った句です。

故人は、普通は死んだ人のことを言いますが、ここでは、違います。古い友人といった意味で使われています。古い友人とは、芭蕉の弟子であり、友人とも言う、服部土芳のことです。二十年ぶりに友人に会った時の思いを述べた句です。

「二十年あまりも会うことのなかった友人二人が、命あって再会することができた。その喜びの二人の中に、桜がいきいきと咲いている。」といった解釈になるでしょう。

「活きたる」は別の本では、「生きたる」と書かれています。どちらにしても、二人の命が生きて会えることと、生き活きとした桜の花を形容しているのでしょう。

この句の背景は、以上のようなものですが、私が今この句を取り上げたのは、「命二つ」という初めの五句を思い出し、又、この学舎に咲く桜の木を思ったからです。

句の成立した背景を越えて、命二つという発想が、心に強く響いてきたからです。

私たちは、命を自分一人のものと考えがちです。

かけがえのない命は、もちろん自分だけのもの。他の人と取り換えようのないものです。

私は<命一つ>と考えていました。

それを芭蕉は、まず<命二つ>と切り出したのです。

命は、自分一人のものですが、一人で支えているものではありません。単数ではなく、複数の命によって支えられているのです。他者の存在なしに、命はありません。

親と自分、友人と自分、他者と自己、それぞれがその命を自分の中に大切に抱えながら、親、友人、もうひとつの命に支えられ、<命二つ>の中で生きているのです。

命は一つで生きていくことはできません。

自分にかかけがえのない命は、相手にとってもかけがえのない命なのです。

人は誰もが意地悪な面を持っています。今まで、一度も人に意地悪をしたことのない人はいないでしょう。相手の心を傷つけたことのない人はいません。傷つけたことがないと思っている人でも、相手が傷つけられたと思っていたことはきっとあるはずです。

私は、君たちより長く生き、君たち以上に人を傷つけてきたに違いありません。私は、自分の命が自分だけのものと勘違いしていたのです。勘違いではなく、「命は一つ」と、思い込んでいたのです。

<命二つ>と、考えることは、相手の心に近づき、自分の身を相手に重ねることです。互いに命の尊厳を認め合うということです。

暴力は、命の尊厳の否定です。いじめは、相手の命を無視することです。

暴力は、相手の心に土足で入り込む乱暴です。乱暴は許されません。

いじめは、最悪の暴力です。

桜が咲きました。命二つ新たな時を迎えました。

互いに命を思いやり、生き活きと、この学舎の桜の木の下で出発しましょう。

今年の北国の春は悲しい春になりました。何時もなら、南から桜前線の便りが、届けられ、その北上に、心が躍りました。今年はその便りに浮き立つことはありません。

しかし、桜は咲きました。今年ほど桜の下の命の大切さを思わない春はありません。

被災者の方々の辛苦は言語表現の及ぶ範囲ではありません。

深い悲しみの中で、入学式を前にした君たちと同じ年代の少年の笑顔がテレビに映し出されました。誰もが、悲しみを胸に秘めています。私にも不安があります。悲しみがあります。しかし、私はその少年の笑顔を見た時、勇気づけられている自分に気づきました。少しでも被災地の方を勇気づけなければならないと考えていた自分が勇気づけられたのです。そのパラドックスに戸惑いながらも私は今それを素直に謙虚に受け止めたいと思います。何げない日常がいかにかげがえのない尊いものであるかを、少年の笑顔が、私の惰眠を覚醒したのです。

私たちは、この日を、日常を支えるすべての人に感謝して迎えたいと思います。

謙虚に、しっかりと互いに命の尊さを思いながら、入学の時を迎えたいと思います。

保護者の皆さん、ありがとうございます。

本校教職員一同を代表し、歓迎と祝意を述べて挨拶を終わります。

諸君、入学おめでとう。

命二つ中に生きたる桜かな。

立教新座高等学校 校長 渡辺憲司